

教育長 様

校番 51 安古市高等学校長
(全日制課程)

「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
研究指定校（STEAM型教育牽引校） 令和7年度実施報告書

1 学校の教育目標等

(1) 教育目標

校訓「仰高」（心豊かな人生の創造をめざし高遠の理想を仰ぐ）のもと、知（学力）、徳（人間性）、体（健康・体力）をバランスよく育み、社会に貢献する人材を育成する。

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

本校の育てたい生徒像（グラデュエーション・ポリシー）は、

高い「志」を持って、

- (1) 多様な価値や意見を尊重する中で、自分の考えを創り適切に行動する人（自律）
- (2) 果敢に挑戦し、粘り強く努力を続ける人（挑戦）
- (3) コミュニケーションを取りながら、他者と協働して社会に貢献する人（貢献）

※「志」とは、「将来の目標」の他、「思いやりの心」、「あきらめない気持ち」、「心を集中すること」、「感謝する気持ち」等を意味する。

※(3)の文中にある「社会」には、仲間・クラス・学校・家族・地域など様々な意味を含む。

その実現のために育成すべき（身に付けたい）資質・能力は、

(1) <自律>については、

- ① 情報リテラシー＝様々な情報や他者の意見の内容を正しく理解し、それらを踏まえて自分の考えや価値観を見直し再構築する力
- ② 自己管理能力＝場面ごとに適切な発言や行動が何か考えながら、自分の学びや生活を調整し将来を設計する力

(2) <挑戦>については、

- ① チャレンジ精神＝自ら設定した目標に果敢に挑戦しようとする態度
- ② 粘り強さ＝目標実現のための計画を立て、その達成に向けて粘り強く努力を続ける力

(3) <貢献>については、

- ① コミュニケーション能力＝他者の話や意見を傾聴したり他者に質問したりする力（聞く力）、考えや話し合ったことを他者に伝える力（伝える力）
- ② 課題発見・解決能力＝課題を見出し、その解決のために協働して考察し、解決策を提案・実行する力

(3) 学科等の特色

本校は普通科高校として、すべての教科で①知識及び技能の習得、②思考力、判断力、表現力等の育成、③学びに向かう力、人間性等の涵養に努めるとともに、「総合的な探究の時間」を中核とした教科横断的な学びを促進する教育活動を展開している。また、ユネスコスクールとして異文化間協働活動に力を入れており、オーストラリアの姉妹校連携をはじめ、「多様性を尊重しながら自分の力で考え行動できる人材」、「高い志を持って他者や社会に貢献できる人材」の育成に努めている。

2 研究結果の概要

(1) STEAM型カリキュラムの改善内容（仮説、検証方法及び検証結果）

ア 研究仮説

「安古市式STEAM教育（各教科で学習したことをふまえ、収束・拡散的に思考しながら試行錯誤を繰り返す、よりよい生活や社会の実現に向けて自ら働きかけることのできる生徒を育てる教育）」の視点を取り入れた探究活動の充実を目的として、地域のLMO毘沙門台（広島型地域運営組織）や大学、本校同窓会と連携し、1学年においては地域探究活動「毘沙門台クエスト」を、2学年においてはPBL型探究活動「知の冒険」という探究活動を行うことを通して、3Dプリンターなどを整備した教室「探究ラボ」を活用して具体的な提案を挙げ、実際に行動に移させることで、生徒の資質・能力の育成を図ることができると考えられる。

イ 検証方法

I G S株式会社のA i G R O Wの結果を基に、生徒が各教科の学習や仰高ゼミ（総合的な探究の時間）、学校行事などを通して身に付けた資質・能力の育成状況を定期的に評価し、その変容を把握する。

ウ 検証結果

A i G R O Wの測定について、第1回を6月11日に、第2回を1月19日に実施した。2回の測定結果から、次のような成果と課題が明らかになった。

（成果）

- 1、2年生ともに、本校が育成を目指す資質・能力（コンピテンシー）は、1回目と2回目の比較においてバランスよく全項目が伸びていた。
- 1、2年生ともに、本校が育成を目指す資質・能力は、全国平均以上のスコアで推移していた。
- 1年生よりも2年生の方が全体的にコンピテンシーの伸び幅が大きく、上級生が成長していた。

（課題）

- 本校が育成を目指す資質・能力の他者評価（A i G R O W）に比べて自己評価（令和7年度広島県高等学校生徒質問紙・学校質問紙調査）の伸びが見られず、自己評価と他者評価の乖離が拡大している。

エ 令和7年度までに開発したSTEAM型カリキュラムの改善内容

○ 探究活動の見通しの共有

（1学年）探究活動の改善と「知の冒険」への接続

昨年度は授業時間数の関係で、「毘沙門台クエスト」終了後の単元を充実させることができなかったことを踏まえ、本年度は来年度の「知の冒険」でより良いスタートを切るために、毘沙門台クエストでのつまずきを教材化し、8時間にわたって実施した。具体的には以下の内容である。

- 探究活動で曖昧だった「問題」と「課題」の区別を考える授業を実施した。
- 情報収集の段階で適切な情報源を活用することができていなかったため、情報検索のサイトを紹介し、実際に使ってみるという授業を実施した。
- 探究活動におけるアンケートの実施方法が分かっていないという現状があったため、適切なアンケートの実施方法について考える授業を実施した。
- スライド作成やグラフの処理等、各教科で学んだことが活かされていないという現状があったため、より良いスライドの作成方法や適切なグラフの使用法について考える授業を実施した。
- 探究活動の結論が、探究テーマに対応するものになっていないという現状があった。そこで、広島市立大学大学院情報科学研究科の鎌田真様を講師として招聘し、「探究活動における主体的な学びとは」と題して実施した教育講演会において、生徒が実際に行った毘沙門台クエストの発表資料を利用して探究のサイクルを振り返る活動を実施した。

(2学年) 自律的探究を支える「冒険指南書」の活用と成果

「冒険指南書」という本校専用の探究活動のホームページを開設した。これにより、生徒の探究が自律的な探究活動になるよう支援できた。また、教員にとっては授業担当者の目線合わせができたり、授業準備等の業務負担の軽減につながったりした。また昨年度に続き、「知の冒険」ポスター発表会において、生徒に講師の選定及び招聘を委ねた。アポイントメント取りから礼状送付まで、全て生徒主体で進めさせた。

(3学年) キャリア教育との結び付き

未来の学び計画書と自己PRを作成させ、未来の学び計画書については夏の三者懇談会で発表させた。また昨年度に続き同窓会に講師を依頼し、希望者対象に自己PR発表会を行い、自己の在り方生き方について捉え直させるとともに、表現スキルの向上を図った。

○ 探究ラボの活用

令和5年度末に設置した教室「探究ラボ」をSTEAM教育の拠点とし、特別講座を実施した。講座では、ハチドリ舎に学ぶ社会実装講座、3Dプリンター体験教室、ライフマネジメントの講座、防災知識の講座などを開き、生徒に進路選択の材料や論理的思考のヒントを提供した。また、教育機材「Schoomy」や3Dプリンターを解決案の具体提案に活用させ、STEM領域への積極的な関与を促した。

(2) 生徒の変容

○ 外部プログラムへの参加

総合的な探究の時間での地域貢献活動や、地域、地元小中学校の活動、外部プログラムに積極的に参加した生徒が増加した。具体的には、総生徒数に対する延べ人数の割合が、今年度は56% (539名/954名) と前年度50% (454名/914名) を上回った。

○ 1学年「毘沙門台クエスト」

毘沙門台クエストで探究のサイクルを1周回したのち、『2学年「知の冒険」に向けて』と題した取組を行い、自分たちの探究活動を振り返り、情報の整理・分析の重要性を理解するようになったり、結論が論理的になっているか考え直したりする姿が見られた。以下、生徒の振り返りを抜粋する。

- 「毘沙門台クエスト全体を通して、周りの環境について分析する力、身近な問題を発見する力、その問題を解決するための方法を考える力の三つを身に付けました。僕はこの力を、日々の学校生活や部活動などに生かしていきたいです。」
- 「実際に歩いて散策したことで、頭で考えるよりもより具体的に問題点を見つけることができました。具体性をもたせること、文章を簡潔にわかりやすくすること、自分事として捉えて物事を考えることも説得力をもたせるには大切だと学びました。」
- 「私は、毘沙門台クエストを通して、高校生でも地域の課題のためにできることが思っていたよりもたくさんあることを知ることができました。また、調べるだけでなく実際にその場に行って調査することで、様々な問題を見つけることができることを学びました。また、今後の学校生活では何か問題について考えるときは、様々な視点や方法から考えるようにしていきたいと思いました。」

○ 2学年「知の冒険」

言語化できていない思いや考えと向き合い、時間をかけて立ち向かったり、話し合っただけに進めようとしたりするなど、継続的に課題と向き合おうとする姿が見られた。以下、生徒の振り返りを抜粋する。

- 「中間発表を失敗したのが、大きな変化のポイントだった。発表前、チーム内では、なかなかいいものが出来たのではないかと思っていた。しかし、実際にみんなの前で発表すると、私たちのスライドや発表の中には、まだまだ改善することがあることに気付かされ、さらにそれを指摘された時、目の前のことだけに捉われず、もっと広い視野を持つべきだったと恥ずかしく思いました。実験の内容も、よりよくするために、(アンケートの)母数を増やしたり正確性を出したりすべきだと思いました。」
- 「最初は自分もグループの人も、あまり積極的に意見を出すことができず、どんなテーマにするかすら、なかなか決まらなくて不安だった。しかし、そんな状況の中で、もっと積極的になろうという気持ちが芽生え、積極的に意見をだすようになり、そこからテンポよく探究の内容が決まり実験ができた。このことから、積極性が大事だということに気付き、実行に移せるようになったところが、一年間で一番の成長だと思う。また、積極的に意見を出せたものの、その意見は他の人から問題点を指摘されたりすることが多かったのも、物事を様々な角度から見て、あらゆる可能性を考える力をもっと伸ばしたいと思った。」

○ 3学年「自己PR発表会」

講師の指導によって表現のスキルが向上しただけでなく、自分がなぜその進路に進みたいのかを考え直すきっかけとなった。以下、生徒の振り返りを抜粋する。

- 自己PR発表会に参加して、最初はとても緊張してしまいました。しかし、「他者の視点から学びを得る貴重な機会」となり参加できてよかったなと思いました。私は今までの経験から興味のあることを取り上げて大学で学びたいこととしていて、将来のイメージが具体的ではなかったので、将来のイメージを具体的にすることが課題となり、自分の課題を客観的に知ることが出来ました。
- STEAM教育特別講座
- 受講者の興味・関心が高まっただけではなく、社会課題を自分事として捉え、将来の自分自身のキャリアについて考えを深める姿が見られた。以下、生徒の振り返りを抜粋する。
- 「キャリア形成についての講座で、今までの自分の人生を折れ線グラフで表現する活動が一番印象に残っています。その講座を通して、よい人生を歩む人は、これまでの人生の中で、多くの挫折や失敗を繰り返しており、その経験があるからこそ、最良の立場があるのではないかと感じました。経験して失敗することは悪いことではなく、むしろ、挫折や失敗を繰り返すことで人は成長すると考えたので、自分も何かに挑戦する機会が回ってきたら、積極的に挑戦してみようという心構えで日々を過ごすようになりました。」
 - 「星と元素と宮沢賢治の講座で、自分が知っている作品の名前や歴史人物が出てきたとき、友達と盛り上がりながら楽しくお話を聞くことができました。自分のたまたま持っていた知識が生かされて新しい知識を得ることができ、知識が増えることで興味も広がるという体験ができたのが、私にとっての大きな収穫で、自分の世界が広がっていくなと感じました。そして、そのために本をたくさん読もうと思いました。」
 - 「ウクレレの講座で、音楽を聴いて幸せな気持ちになってほしい、演奏を聴く人が何を感じてくれるかを意識して演奏している、などのお話や演奏を聴いて、前は今習い事として続けているピアノをそろそろやめようかなと考えていたけれど、音楽の良さを改めて感じたので、やっぱり大人になって仕事としてじゃなくとも続けていきたいと思うようになりました。生涯学ぶことができる、というのは素敵だと思います。」

3 学校実態調査結果（報告書作成時点のもの）

	調査名	項目	結果
(1)	生徒質問紙調査	Ⅱ (68)「総合的な探究の時間の学習を通して、将来の夢や目標が明確になってきたと思います。」において、「よく当てはまる」と回答した生徒の割合	4.9%
(2)		Ⅱ (70)「総合的な探究の時間の学習が、各教科での学びに役立っています。」において、「よく当てはまる」と回答した生徒の割合	3.2%
(3)		Ⅱ (79)「自分は学校が育成を目指す資質・能力を身に付けていると思います。」において、「よく当てはまる」と回答した生徒の割合	9.4%
(4)	学校質問紙調査	I (7)「各教科において、課題を発見し、解決する過程を通じた「主体的な学び」を全教員が実践している。」において、「ほとんどの教員が当てはまる（8割以上の教員が実践している）」と回答した教員の割合	50.0%
(5)		I (8)「総合的な探究の時間において、課題を発見し、解決する過程を通じた「主体的な学び」を全教員が実践している。」において、「ほとんどの教員が当てはまる（8割以上の教員が実践している）」と回答した教員の割合	100.0%
(6)		Ⅲ (24)「生徒が「各教科ならではの物事を捉える視点や考え方（各教科における「見方・考え方」）」を組み合わせさせて働かせ、課題解決に取り組み、その中で得られた学びを教科・科目の学習に生かすことができるように、組織的に計画・実施している。」において、「1と2」又は「1と2と3」と回答した教員の割合 1 学年会議や総合的な探究の時間の担当者会議等で、生徒が複数の教科の「見方・考え方」を組み合わせさせて働かせることができるように、学習内容を計画し、実施している。 2 学年会議や総合的な探究の時間の担当者会議等で、総合的な探究の時間の学びを各教科・科目の学習に生かすことができるように、意見交換・情報共有等を行っている。 3 学年会議や総合的な探究の時間の担当者会議等で、生徒が複数の教科で学習した「知識や内容」を活用できるように、各教科の学習内容を共有している。	100.0%

		4 学年会議や総合的な探究の時間の担当者会議等で、生徒が複数の教科の「見方・考え方」を組み合わせる働きかけたり、学習した「知識や内容」を活用したりできるような取組を行っていない。	
(7)	生徒実態調査	学校外での探究活動（発表会等も含む）に参加した生徒数	539 人
(8)		学校内外での探究活動の成果を自身の進路選択に活用した生徒数 (例) 学校推薦型選抜、総合型選抜を受験した生徒数 等	64 人
(9)	学校評価アンケート(生徒対象)	「私は総合的な探究の時間に積極的に取り組み、よりよい学校や社会になるために工夫・改善している」において、肯定的な回答をした生徒の割合	92.4%

4 令和7年度の研究成果及び課題

(1) 成果

○ 教員の変容

学校実態調査結果(4)より、ほとんどの教員が総合的な探究の時間の指導に積極的に取り組んでいることが明らかになった。これは、毎週定例の学年会議において、総合的な探究の時間の指導案を検討し研修していることや、年に2回実施した校内研修等を通して、新たな学習活動の方針を納得してもらったり、自分事として取り組んでもらったりした結果であると考えられる。また、探究活動を生徒主体のものとするために、委員会の生徒(仰高委員)に授業の準備やサポートを任せたり、探究活動を深めるために大学生・大学院生にアドバイスをもらう機会を昨年度以上に設けたことなどが、結果として総合的な探究の時間の担当者の負担を軽減し、指導に対する気持ちのハードルが下がったのではないかと考えられる。

○ 生徒の変容

1学年では「毘沙門台クエスト」を通じ、他者とコミュニケーションをとる中で、重要な情報を簡潔にまとめる力や論理的な結論を導く技術を習得した。また、身近な課題を発見・解決する力を育み、より具体的な視点で課題に取り組む姿勢が見られた。2学年では「知の冒険」を通じ、失敗や意見の対立を乗り越え、積極的に行動する中で、チャレンジ精神と粘り強さが養われた。3学年では「未来の学び計画書」「自己PR」を通じ、将来像を具体的に描く力が高まり、自己管理能力も向上し、進路への意識が深まった。また、STEAM教育特別講座で多様なテーマに触れたことで好奇心が広がり、社会課題への関心をキャリアに結び付ける意識が育った。課題発見・解決能力や表現力が向上し、生徒は主体的に取り組む姿勢を身に付けた。

(2) 課題

一つ目は、探究活動の深さと成果のばらつきである。探究テーマや取り組み方に個人差が大きく、一部の生徒が十分な成果を得られない状況が見られた。特に、情報収集や分析、結果の発表において指導を受ける機会やサポートが不足した点が課題として挙げられる。

二つ目は、論理的思考力や表現力の個人差である。考えを明確に構築し他者に伝える力にばらつきがあり、全体の底上げが必要だと判断される。

三つ目は、長期的に生徒の変容を促す仕組みの不足である。学びの成果を一過性に留まらない継続的な成長につなげるためには、振り返り活動や成長を共有する場が欠かせない。これらの課題を解消するためには、教科等を横断した取組が必要である。例えば、様々な教科において探究活動や課題解決に関する学びを連携させるなど、生徒の視野を広げ、学習成果の定着及び継続的な学びを支える仕組みの構築が求められる。

5 令和8年度の目標及び取組内容

(1) 令和8年度の目標

ア アウトプット(活動指標)

- 教職員研修を年2回実施し、安古市式STEAM教育の推進を図る。

イ アウトカム(成果目標)

- 学校独自アンケートにおける「各教科での学びが総合的な探究の時間の学習での学びに役立っています。」に対して、「よく当てはまる」と回答した生徒の割合が50%となっている。
- 学校質問紙調査における「各教科において、課題を発見し、解決する過程を通じた「主体的な学び」を全教員が実践している。」に対して、「ほとんどの教員が当てはまる(8割以上の教員が実践している)」と回答した教員の割合が100%となっている。
- 生徒質問紙調査における「自分は学校が育成を目指す資質・能力を身に付けていると思います。」に対して、

「よく当てはまる」と回答する生徒の割合が30%となっている。

(2) 令和8年度のカリキュラム改善の内容

- 各教科・科目において、日常生活を題材とし、学校が育成を目指す資質・能力を育てるパフォーマンス課題を考案し、実施・検証する。
- 教職員研修に加えて、ワークショップも行っていき、教員同士が本音で議論できる機会を設ける。
- 生徒の非認知能力の育成を目的に、非認知能力の測定結果を活用し、生徒一人ひとりが自己成長を実感できる指導と学習活動を組み込む。

6 令和7年度会計報告

対象	費目	金額 (円)	積算基礎 (円)
連絡協議会	旅費 (出張旅費)	19,565	1 出張旅費 (1) 1人×1回 (7/25) ×@9,730=9,730 (2) 1人×1回 (1/22) ×@9,835=9,835
研究の推進	報償費 (講師謝金など)	45,300	1 外部講師謝金 (1) 1人×1回×@9,600=9,600 (1/14 広島市立大学 鎌田准教授) (2) 2人×1回×@17,850=35,700 (1/21 広島市立大学 永山教授、卜部教授)
	旅費 (講師旅費など)	9,080	1 外部講師旅費 (1) 1人×1回×@1,240=1,240 (1/14 広島市立大学 鎌田准教授 上天満町～広島BC～安古市高校北口) (2) 1人×1回×@1,640=1,640 (1/21 広島市立大学 永山教授 ころも団地西～大塚駅～毘沙門台～安古市高校北口) (3) 1人×1回×@1,440=1,440 (1/21 広島市立大学 卜部教授 Aシティ中央～大塚～毘沙門台～安古市高校北口) (4) 2人×1回×@1,620=3,240 (1/21 叡啓大学 学生 銀山町～紙屋町東/県庁前～毘沙門台/毘沙門台中～安古市高校北口) (5) 1人×1回×@1,520=1,520 (1/30 川村 幹典様 南観音三丁目～本通～大町～安古市高校北口)
	需・他 (研究に必要な物品購入費など)	199,000	1 タブレット端末および付属品 1式 95,500 2 デジタルカメラおよび付属品 1式 103,500
研修等での実践報告	旅費 (STEAM型カリキュラム推進研修旅費)	13,340	1 受講者旅費 (1) 1人×1回 (6/6) ×@740=740 (2) 1人×1回 (9/29) ×@10,340=10,340 (3) 1人×1回 (12/9) ×@740=740 2 参加者旅費 (1) 1人×1回 (6/6) ×@760=760 (2) 1人×1回 (12/9) ×@760=760